

指定討論 1

動機づけと社会性の間を情動をもって架橋する

東京大学 遠藤利彦

子どもの日常生活に直に目を向けた時に、彼らの種々の動機づけが、重要な他者との関係性あるいは暗黙裡の社会的基準や規範といった、広く社会性と言われるものによって下支えされていることは、ある意味、自明である。また、動機づけに駆られてとった行動の帰結が、成功にせよ、失敗にせよ、社会性の獲得や発達に様々な影響を及ぼし得ることも然りである。しかし、心理学的な研究の現況は、動機づけと社会性との間に、不自然にも深い溝を引き、本来、密につながれて在るはずの相互の関係性の解明を、不当にも怠ってきていると言わざるを得ない。その意味で、今回の企画は、私たち心理学徒が、それを省み改めるための、重要な契機になり得るものと言えよう。伊藤氏による関係論的発達理論あるいは「個」×「環境」モデルから社会性および動機づけの発達を問うという方向性、また小泉氏によるSELの実践を通じて豊かな動機づけを育むという視座、さらには中谷氏による子どもの仲間や教師との相互作用から学業的目標に対する動機づけへの影響機序を考究するという姿勢は、これからのこの領域における三者三様の新しい形を提示しており、きわめて刺激的なものであった。本来であればそれぞれについて評言を寄せるべきところであるが、紙数にも限りがあるため、ここでは、動機づけと社会性の間をつなぐ一種の膠として、特に情動に着目し、短い私論を呈することにした。

かつて、動機づけと情動は本源的に密接な関連性を有するものとして、同時に問題にされることが多かったと言える。なぜならば、情動は主に、様々な行動に対して人を強く動機づけるもの (motivator) として認識されていたからである。しかし、心理学の進展とともに、そうした事情は徐々に変質し、動機づけのペア・パートナーは、今や、情動そのものというよりも、むしろ情動制御に挿げ替えられてしまったと言っても過言ではないのかも知れない。こうした事情は、殊に教育心理学において顕著であり、勉強という、いわば社会的に価値づけられた行動に対する動機づけを、人の情動は多くの場合、ひどく掻き乱すものと見なされ、そして、それゆえに情動ではなく、情動制御がむしろ、そうした望ましい動機づけとの関連において必須不可欠の要素として、より重視されるに至っているのである。無論、勉強に対するやる気や意欲も、情動の一種と見なし得るものではある。そして、そこに関わる心理学的機序やそれらを最大化するための方途なども確かに精力的に研究されてきてはいる。しかし、そこでの理論化が、直接、情動に関わる術語をもってなされることは稀少であると言わざるを得ない。「もっと知りたいから、わかるようになりたいから」という興味 (interest) や望み (hope), 「どんどんわからなくなっていったら大変だから」という不安 (anxiety), 「できるところを見せたいから」という (予期的な) 誇り, 「無能とは思われたくないから」という (予期的な) 恥など、大概の動機づけにはそれぞれに特異的に結びついた情動が介在している訳であるが、いざ、動機づけの理論化ということになると、そこから情動に関する直接的な言及は消え、原因帰属や目標志向性など、純粹に認知論的な術語が取って代わることになるのである。

社会性に関しても、本来、情動は特に他者との関係性の構築や維持に枢要な働きをなすものである訳であるが、その発達の理論化に際して、情動が直接に問題にされることは意外にも少ないのかも知れな

い。例えば、向社会的行動の発達に関しては、その研究において、結果的にカント的見方（＝理性・認知主義）が大勢を占めることになり、ヒュームの見方（情動主義）の影は相対的に希薄になっていると言わざるを得ないのである。そこには、確かに共感性（empathy）という情動の関与が想定されているのだが、直に研究の対象となるのは、あくまでも実験課題等に対するオフライン型の第三者的な向社会的判断や推論であり、そこで、オンライン型処理として在る、それこそ共感性そのものが色濃く絡んだ、現実の当事者的な向社会的行動の質が問われることは稀なのである。共感性は、一般的に、①他者の情動を覚知すること、②その人の情動を自らも感じる事、③他人の苦痛に同情をもって反応することという三層からなると言われるが、研究の中で主に問われるのは、せいぜい①のレベルに止まると言えるのかも知れない。すなわち、認知としての共感的な理解は問われても、向社会的行動の究極の“motivator”たる、情動としての共感性それ自体が十分に掬われることは殆どないのである。

このように、心理学の研究の基底には、一種の排情主義が広く横たわっていることは否めない訳であるが、殊に子どものあるべき発達やそのための教育ということを真摯に突き詰めて行くのであれば、本来、子どもが生活の現場で経験する種々の情動にもっと直接的に研究の目を向け、また実践的な働きかけをなしていかななくてはならないのであろう。学校という場を一つ例にとって見ても、子どもは教師や仲間と、信頼・親和・連帯・追従・軋轢・葛藤・社会的比較など、きわめて多様な関係性を持ち得る。そして、それは、恥・誇り・罪・羨望・妬み・憧憬・賞賛・尊敬・侮蔑・共感的喜び・共感的苦痛・シャードンフロイデなど、複雑な社会的情動や自己意識的情動を生み出す。そして、そうした情動は、子どもに、正負両面の様々な動機づけをもたらし、その中で子どもは狭く社会性のみならず、学力も含めた、多様な育ちを具現していくものと考えられる。しかし、例えば、発達や教育の研究の中で、教師や上級生、場合によっては身近な仲間等に対する、尊敬や憧憬などの情動が、子どもの自己ピグマリオン効果等を介して、子どもの学業に対する取り組みや学力の向上へと通じるプロセスが、真摯に問われたことがどれだけあったらうか。また、仲間との社会的比較を通じた恥や妬みの情動が、ただ悪しきものとしてではなく、子どもの自己是正や自己向上の動機づけを介して、子どもの種々の能力や特性の引き上げに通じ得るという可能性が、心理学的に追究されたことがどれだけあったらうか。

無論、従来の動機づけ研究の枠組みでも、個次元の動機づけ（充実志向・訓練志向など）のみならず、種々の社会的情動が絡む関係次元の動機づけ（関係志向・自尊志向など）もまた理論的には想定されてきた。しかし、その重要性の認識は、前者に比べて後者で、圧倒的に低くあったことも否めないところであろう。だが、自己意識的情動の研究などにおいては、西欧圏では一般的にタブーとされる恥の情動を利した子どもの社会化や、あるいは成人レベルでも日常生活一般での恥を経験したり、それに予防的に対処したりすることが、日本を含めた東洋圏においては、それが極端に過ぎない限り、相対的に適応的かつ健康的な意味を有し、種々の社会性や能力・知力等の自己是正や自己向上に一定の効果を持ち得るという指摘もあるのである。相対的に関係性と自己との関わりが深い文化的風土では、効果的な動機づけの形も微妙に異なる可能性があり、その可能性の追究の先に、もしかすると、日本独自の動機づけ研究の一つの方向性があると言えなくもないのかも知れない。いずれにせよ、社会性の次元から学校適応や学習動機づけ等を考えるという道筋は、こうした従来、あまり注視されなってきた社会的情動（殊に相対的に望ましくないとされていた恥や妬みといった負の情動）が及ぼし得る正の効用にも目を向けざるを得ないことを含意しているのだと言える。

動機づけと社会性の間を理論的に架橋することにおいて、それらが相互に影響を及ぼすということに加えて、もう一点、考慮されなければならない点は、それらが時に競合するものでもあるということである。人は、基本的にその生活全体において、実に多様な利害関心や潜在的目標を同時に抱え込んでい

る存在であることを忘れてはならないだろう。動機づけにしても、社会性にしても、その従来の問題のされ方は、各領域に閉じた形でそれぞれの重要目標を想定し、あくまでもその単一の目標に向けた行為を個人がいかにか効率的に取り得るのかを明らかにしようとするものであったと言える。すなわち、課題／目標志向的 (task/goal-oriented) な関心で、専ら研究が進められてきたのである。しかし、すぐにでも勉強に勤まなければならないという焦燥と、壊れつつある友人との関係性を何とか元通りにしなければという不安とは、必ずしも同時には解消され得ず、時にどちらかを優先し、どちらかを後回しにしなければならないものとして在る。さらに言えば、それぞれの領域内においても、例えば、英語を何とかしなければならぬという気持ちと、国語に時間を割かなければという思いとはしばしば競合するし、Aとの関係を大切にしたいという気持ちと、Bに義理立てしなければという思いもまた時に相容れない場合があるのである。

すなわち、全人的な視座から見れば、その個人のトータルな適応性は、いかに、そうした時に競合する目標間のバランスの調整を図り、その時々状況や文脈に応じて、それらに適切な優先順位を付しながら、効果的な行動を取り得るかということになるのだろう。そして、それは取りも直さず、時にきわめて両面的にもなり得る情動を、いかにうまく調節し得るかということでもある。だが、従来、こうした全人志向的 (person-oriented) な関心をもって、動機づけなり社会性なりが、真摯に問われたことは殆どなかったように思われる。おそらく、これからの発達心理学あるいは教育心理学が、真に子どもの発達や教育に資するものになるためには、こうした点への刮目が必須不可欠になるものと言えよう。本来、しつけや教育が目指すべきことは、あらゆることに対して一様に高く好ましい動機づけの状態をもたらすということでは必ずしもなく、動機づけに関わる個人のリソースを全体的に底上げすることと同時に、その領域間のトレードオフの仕方を調整してやること、あるいはその個人自らがうまく調整できるように導くことなのかも知れない。